

自我同一性，時間的展望，心理的非柔軟性が 大学生の無気力に及ぼす影響について

大島すみか・石津憲一郎

自我同一性，時間的展望，心理的非柔軟性が 大学生の無気力に及ぼす影響について

大島すみか*・石津憲一郎

The Effects of Identity, Time Perspective, and Psychological Inflexibility on Student's Apathy

Sumika OSHIMA・Kenichiro ISHIZU

キーワード：無気力，自我同一性，時間的展望，心理的非柔軟性

Keywords : student's apathy, identity, time perspective, psychological inflexibility

I. 問題と目的

スチューデント・アパシーとは、特定の原因がないにもかかわらず勉学に対して選択的に無気力を示して、無感情化した大学生の状態を指した言葉である。アパシー (apathy) は、語源はギリシャ語の pathos (passion) の「欠如」という意味であり、一般的には「感情や興味の欠如」と定義される (Marin, 1991)。また、精神医学用語としては、無感情や感情鈍麻を意味し、本来重症のうつ病、精神分裂病、脳器質疾患の症状とされた (新福, 1984)。それに対して Walters (1961) が、男らしさの形成という青年期後期の課題に関して独特のアパシー状態を示す男子大学生が見られることを指摘し、これにスチューデント・アパシーとの名称を与えた。このような経緯から、スチューデント・アパシーの障害には、アパシーが本来もつ精神病理的側面と、大学生の青年期課題と関わる発達心理的側面とが混在する多面性が認められる。

スチューデント・アパシーを特徴づける障害として必ず指摘されるのが、部分 (選択的) 退却と呼ばれる、学生生活の一部分についてのみの選択的な回避 (退却、撤退) 行動である (下山, 1995)。つまりスチューデント・アパシーの学生は、抑うつ等で見られるような生活全般からのひきこもりではなく、困難が予想される場面のみを選択的に避けるといった部分分裂的な行動障害を特徴とする。狩野・津川 (2011) によるスチューデント・アパシー的無気力群と抑うつの無気力群を分類しそれぞれの特徴を調べた研究では、スチューデント・アパシーの特徴として、抑うつを感じたときに否定的に考え込む傾向、分析的に考え込む傾向がともに低いことが挙げられている。こうしたスチューデント・アパシーの特徴を、下山 (1997, 2000) は“悩めない”心理障害、“悩めない”

行動障害と指摘している。

国立大学を対象とした実態調査において、休学、退学の理由で最も多いものが“消極的理由”であることが示され、以後、無気力化した学生についての研究が行われてきた (丸井, 1967)。それ以降、心理学領域における無気力の研究は、大きく分けて二つの視点から研究がなされてきた (下坂, 2002)。一つは、上述したスチューデント・アパシーの視点、もう一つは抑うつの視点である。スチューデント・アパシーとは、特定の原因がないにもかかわらず勉学に対して選択的に無気力を示して、無感情化した大学生の状態を指した言葉である。抑うつの視点からの無気力研究は、学習性無力感 (Seligman & Maier, 1967) と関連付けられたものを始めとして、無気力化した状態と抑うつ状態を等価的に扱って研究が行われている (例えば、桜井, 1995, 2000; 下坂, 2001; 吉田・鈴木, 1985)。狩野・津川 (2011) は、抑うつの無気力を、落ち込み、憂うつな気分がやや継続し、やる気がなくなっている状態 (桜井, 2000)”と定義し、スチューデント・アパシー的無気力として、冒頭の“精神病的無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示す状態 (鉄島, 1993)”と定義した。そして、それぞれの無気力を示す学生の状態像が異なることから、無気力を示す学生について抑うつを伴う群 (抑うつの無気力群) と伴わない群 (スチューデント・アパシー的無気力群) の2群に区別できる可能性を示した。

さて、このうちの後者であるスチューデント・アパシー的無気力について、Erikson (1959) のアイデンティティ理論の側面から見た場合、「自我同一性 (アイデンティティ) 拡散」の障害に含まれる時間的展望の拡散、勤勉さの拡散が、スチューデント・アパシーの重要な発生機制の一つであると捉えられている (馬場, 1976)。時間

* 富山県立砺波学園

的展望とアパシーの関連については、杉山・神田（1996）が青年期における一般的統制感と時間的展望、そしてそれらとアパシー傾向との関連性について研究している。その結果、時間的展望体験尺度の未来尺度（目標志向性尺度と希望尺度）が、アパシー傾向に負の影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかし、時間的展望とスチューデント・アパシーの関連について研究した研究はまだ少ない。小此木（1974）を含め、これまでの先行研究において、時間的展望と自我同一性との関連については指摘がなされてきた。小此木（1974）は、アイデンティティの拡散症状の一つに時間的展望の拡散を挙げており、都筑（1993）は、国内外におけるこれまでの研究を概観し、時間的展望と同一性の達成度との関連が示唆されていると述べている。

また、加藤（1983）の同一性地位判定尺度を用いた先行研究より、以下のことが見出されている。同一性達成地位は自分自身の過去・現在・未来をより統合した形で捉えながら、同時に未来志向的でもあること（都筑、1993, 1994；渡邊・赤嶺, 1996）、モラトリアム地位は未来志向的ではあるが、同一性達成型よりも時間的統合度が低いこと（都筑, 1993）、そして同一性拡散地位は他の地位よりも、過去・現在・未来のすべてについてネガティブにイメージしていること（都筑, 1993, 1994；渡邊・赤嶺, 1996）である。以上のことから、同一性達成地位にある者は最も時間的統合がなされ、未来をポジティブに捉えており、同一性拡散地位にある者は時間的統合度が他の地位よりも低く、過去・現在・未来のすべてをネガティブに捉えていることが分かる。さらに、森・河村（2001）による自我同一性地位と充実感との関連を調べた研究において、同一性達成群の特徴としては、日常生活に生きがいを見出し、張りのある生活を送っていると自覚していることが示唆された。これは、Erikson（1959）の理論や大野（1984）の研究における、充実感と自我同一性統合度とは高い相関があるという結果を支持するものであった。また、同一性拡散群の特徴としては、日常生活において退屈・空虚感を感じ、自分に自信がなく、孤独や孤立感を感じ、時間的展望も拡散している状態であることが示唆された。これは、Erikson（1959）における同一性拡散の臨床像として挙げられる、親密さの問題や自意識の過剰、時間的展望の拡散などの特徴と一致するものであり、そういった側面が生活実感として感じられるものであることをあらわしている。

以上のように、自我同一性と時間的展望の関連について調べた研究はあるが、これらとスチューデント・アパシーとの関連を調べた研究は少ない。

また、スチューデント・アパシーの特徴として、抑うつになったときに否定的に考え込む傾向、分析的に考え込む傾向がともに低いこと（狩野・津川, 2011）や困難場面からの回避行動が見られることが示されている。下山（1997, 2000）は、こうした特徴をして、“悩まない”

心理障害、“悩まない”行動障害としているが、このスチューデント・アパシーの回避行動と類似の概念に、心理的非柔軟性を構成する「体験回避」がある。心理的非柔軟性の逆の概念である心理的柔軟性は、「生きていくために立ちほだかる問題や課題に対し、そこから回避することなくより効果的に反応する力（Harris, 2009）」のことを指し、この心理的柔軟性の低さ（心理的非柔軟性の高さ）は、自分が望まない嫌な思考、感情、感覚や記憶といったものを排除しようとする体験回避と、自分の思考に囚われ、身動きが取れなくなる“認知的フュージョン”から構成されている（Greco, Lambert, & Baer, 2008）。国内における先行研究は少ないが、柳原・川井・嶋・熊野（2014）は、自分で生み出した思考や感情を脅威とみなしてしまうことで、「体験の回避」の生起頻度が高まることを示した。ストレスと向きあうことは様々な感情や思考が生起することになる。ただ、そこから回避しようとする心理的非柔軟性の「体験回避」は、困難場面にあらかじめ陥らないよう、悩むことを避けるという意味での「回避行動」と類似する概念であり、上述の「悩めない」「悩まない」行為障害と関連があると思われる。さらに、同一性が達成されていたり、時間的展望をもっていたりしても、回避行動をしている場合はスチューデント・アパシーにつながるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、自我同一性、時間的展望、心理的非柔軟性、スチューデント・アパシーがそれぞれどのように関連するのかについて探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

調査協力者

北陸地方の大学の学生 279 名（男子 172 名、女子 107 名）である。そのうち、記入漏れがあったものを除いた 253 名（男子 155 名、女子 98 名）を分析対象とした。平均年齢は 19.33 歳であった。また、標準偏差は 1.37 であった。

手続き

2014 年 7 月、T 大学の講義の時間に質問紙調査を行った。質問紙は、調査協力者の同意を得たうえで調査者が一斉に配布し、その場で実施・回収した。なお、調査は無記名で行われた。

調査内容

①フェイスシート

年齢と性別を尋ねた。回答内容や個人情報保護は保護されること、成績には一切関係のないことを教示し、答える際の不安を軽減するよう配慮した。また、本アンケートへの回答は強制ではないことを口頭で伝えた。

②意欲低下領域尺度

意欲低下領域尺度は、全 15 項目からなる下山 (1995) の作成したものを使用した。この尺度は「気力低下」、「授業意欲低下」、「大学意欲低下」の 3 つの下位尺度から構成されている。回答方法は「全く当てはまらない」「当てはまらない」「やや当てはまらない」「やや当てはまる」「当てはまる」「とても当てはまる」の 6 件法で、それぞれの得点を 1—6 点とした。

③時間的展望体験尺度

時間的展望体験尺度は、全 18 項目からなる白井(1994) の作成したものを使用した。この尺度は「現在の充実感」「目標志向性」「過去受容」「希望」の 4 つの下位尺度から構成されている。回答方法は「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまる」「あてはまる」の 5 件法で、それぞれの得点を 1—5 点とした。

④心理的柔軟性尺度 (AFQ-Y: Avoidance and Fusion Questionnaire for Youth)

心理的柔軟性尺度は、全 17 項目からなる Greco et al (2008) の作成したものを Ishizu, Shimoda, & Ohtsuki (2014) が翻訳したものを使用した。この尺度は「体験

回避」と「認知的フュージョン」を含んだの 1 つの下位尺度から構成されている。回答方法は「全くそう思わない」「少しだけそう思う」「まあそう思う」「そう思う」「とてもそう思う」の 5 件法で、それぞれの得点を 1—5 点とした。

⑤同一性地位判定尺度

同一性地位判定尺度は、全 12 項目からなる加藤(1983) の作成したものを使用した。この尺度は「現在の努力」「過去の危機」「将来の自己投入への希求」の 3 つの下位尺度から構成されている。回答方法は「全然そうではない」「そうではない」「どちらかといえばそうではない」「どちらかといえばそうだ」「かなりそうだ」「まったくそのとおりだ」の 6 件法で、それぞれの得点を 1—6 点とした。

Ⅲ. 結果

すべての尺度において、因子分析を行った結果、意欲低下領域尺度と同一地位判定尺度においては、先行研究とは異なる因子が抽出された。因子分析の結果は Table1, Table2 に示した。また、各得点の最小値・最大値・平均値・標準偏差を記述統計として Table3 に示した。

Table1 意欲低下領域尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	共通性
学業意欲 ($\alpha = .66$)				
大学で勉強をすることで自分の関心を深めている	.82			.60
必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている	.57			.26
大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である	.39			.37
勉強では疑問に思う時はすぐに調べる	.39			.22
教師に言われなくても自分から進んで勉強する	.30			.20
勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	-.20			.15
気力低下 ($\alpha = .77$)				
朝寝坊などで授業に遅れることが多い		.77		.40
何となく授業をさぼることがある		.73		.54
授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある		.57		.40
授業に出る気がしない		.52		.55
大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い		.46		.21
大学での居場所なし感 ($\alpha = .60$)				
大学のなかで自分の居場所がないと感じる			.77	.52
大学にいるより、自分ひとりであるほうがいい			.56	.26
学生生活で打ち込むことがない			.54	.34
因子間相関				
	F1	1.00	.32	-.28
	F2		1.00	-.52
	F3			1.00

Table2 同一性地位判定尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	共通性
危機経験($\alpha=.66$)				
私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、 かつて真剣に迷い考えたことがある	.83			.67
私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある	.60			.46
私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、 今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている	.47			.47
現在の努力($\alpha=.61$)				
私は今、目標をなしとげるために努力している		.90		.68
私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうと しているのかを知っている		.50		.31
同一性拡散($\alpha=.65$)				
私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない			.75	.46
私は、『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない			.46	.41
私には、特にうちこむものはない			.46	.45
私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない			.41	.23
因子間相関				
	F1	1.00	.26	-.04
	F2		1.00	-.56
	F3			1.00

Table3 各変数の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準 偏差	α 係数
学業意欲	8.00	35.00	21.71	4.32	.66
気力低下	5.00	29.00	15.15	5.00	.77
大学での居場所なし感	3.00	18.00	8.19	2.77	.62
現在の充実感	5.00	25.00	16.48	3.77	.76
目標志向性	5.00	24.00	14.66	4.06	.78
過去受容	4.00	20.00	13.11	3.06	.62
希望	4.00	20.00	13.17	3.13	.73
危機経験	3.00	18.00	11.84	3.00	.65
現在の努力	2.00	12.00	6.97	2.07	.61
同一性拡散	4.00	22.00	11.17	3.60	.66
心理的非柔軟性	17.00	71.00	42.32	11.23	.87

それぞれの尺度において、因子ごとに信頼性の分析を行った。意欲低下領域尺度においては、第1因子「学業意欲」 $\alpha = .66$ 、第2因子「気力低下」 $\alpha = .77$ 、第3因子「大学での居場所なし感」 $\alpha = .62$ となった。時間的展望体験尺度においては、第1因子「現在の充実感」 $\alpha = .76$ 、第2因子「目標志向性」 $\alpha = .78$ 、第3因子「過去受容」 $\alpha = .62$ 、第4因子「希望」 $\alpha = .73$ となった。同一性地位判定尺度においては、第1因子「危機経験」 $\alpha = .65$ 、第2因子「現在の努力」 $\alpha = .61$ 、第3因子「同一性拡散」 $\alpha = .66$ となった。心理的柔軟性尺度においては、 α 係数は.87であった。この結果から、尺度全体としては、ある程度の信頼性を得たと判断した。

続いて、各変数間の相関を検討するため、Pearsonの相関分析を行った (Table4)。意欲低下領域尺度第1因子「学業意欲」は、時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「希望」、同一性地位判定尺度における「危機経験」「現在の努力」との間で有意な正の相関（それぞれ $r=.38$ 、 $r=.42$ 、 $r=.35$ 、 $r=.33$ 、 $r=.42$ 、いずれも $p < .01$ ）があった。一方、同一性地位判定尺度における「同一性拡散」との間では有意な負の相関($r = -.43$, $p < .01$)があった。心理的柔軟性尺度とは無相関であった。意欲低下領域尺度第2因子「気力低下」は、同一性地位判定尺度における「同一性拡散」、心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間で有意な正

Table4 各得点間の相関係数

意欲低下領域尺度			時間的展望体験尺度				同一性地位判定尺度			心理的柔軟性尺度	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
学業意欲	気力低下	大学での居場所なし感	現在の充実感	目標志向性	過去受容	希望	同一性達成	現在の努力	同一性拡散	心理的非柔軟性	
1	1	-.30**	-.34**	.38**	.42**	.03	.35**	.33**	.42**	-.43**	-.10
2		1	.25**	-.20**	-.22**	-.11	-.19**	-.13*	-.25**	.26**	.22**
3			1	-.53**	-.34**	-.31**	-.47**	.06	-.27**	.50**	.38**
4				1	.36**	.36**	.57**	-.13*	.35**	-.51**	-.48**
5					1	.10	.64**	.09	.57**	-.59**	-.14*
6						1	.28**	-.26**	.04	-.18**	-.50**
7							1	.48**	-.61**	-.32**	
8								1	.29**	-.10	.28**
9									1	-.41**	-.04
10										1	.30**
11											1

** $p < .01$, * $p < .05$

の相関 (それぞれ $r = .26$, $r = .22$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「希望」, 同一性地位判定尺度における「危機経験」「現在の努力」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.20$, $r = -.22$, $r = -.19$, いずれも $p < .01$, $r = -.13$, $p < .05$, $r = -.25$, $p < .01$) があつた。意欲低下領域尺度第3因子「大学での居場所なし感」は, 同一性地位判定尺度における「同一性拡散」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .50$, $r = .38$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「過去受容」「希望」, 同一性地位判定尺度における「現在の努力」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.53$, $r = -.34$, $r = -.31$, $r = -.47$, $r = -.27$, いずれも $p < .01$) があつた。

時間的展望体験尺度第1因子「現在の充実感」は, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 同一性地位判定尺度における「現在の努力」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .38$, $r = .35$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 意欲低下領域尺度における「気力低下」「大学での居場所なし感」, 同一性地位判定尺度における「危機経験」「同一性拡散」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.20$, $r = -.53$, いずれも $p < .01$, $r = -.13$, $p < .05$, $r = -.51$, $r = -.48$, いずれも $p < .01$) があつた。時間的展望体験尺度第2因子「目標志向性」は, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 同一性地位判定尺度における「現在の努力」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .42$, $r = .57$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 意欲低下領域尺度における「気力低下」「大学での居場所なし感」, 同一性地位判定尺度における「同一性拡散」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.22$, $r = -.34$, $r = -.59$, い

ずれも $p < .01$, $r = -.14$, $p < .05$) があつた。時間的展望体験尺度第3因子「過去受容」は, 意欲低下領域尺度における「大学での居場所なし感」, 同一性地位判定尺度における「危機経験」「同一性拡散」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間で有意な負の相関 (それぞれ $r = -.31$, $r = -.26$, $r = -.18$, $r = -.50$, いずれも $p < .01$) があつた。時間的展望体験尺度第4因子「希望」は, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 同一性地位判定尺度における「現在の努力」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .35$, $r = .48$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 意欲低下領域尺度における「気力低下」「大学での居場所なし感」, 同一性地位判定尺度における「同一性拡散」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.19$, $r = -.47$, $r = -.61$, $r = -.32$, いずれも $p < .01$) があつた。

同一性地位判定尺度第1因子「危機経験」は, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .33$, $r = .28$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 意欲低下領域尺度における「気力低下」, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「過去受容」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.13$, $r = -.13$, いずれも $p < .05$, $r = -.26$, $p < .01$) があつた。

同一性地位判定尺度第2因子「現在の努力」は, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「希望」との間で有意な正の相関 (それぞれ $r = .42$, $r = .35$, $r = .57$, $r = .48$, いずれも $p < .01$) があつた。一方, 意欲低下領域尺度における「気力低下」「大学での居場所なし感」との間では有意な負の相関 (それぞれ $r = -.25$, $r = -.27$, いずれも $p < .01$) があつた。心理的柔軟性尺度とは無相関であつた。同一性地位判定尺度第3因子「同一性拡散」は, 意欲低下領域尺度における「気力低下」

「大学での居場所なし感」, 心理的柔軟性尺度における「心理的非柔軟性」との間で有意な正の相関（それぞれ $r=.26, r=.50, r=.30$, いずれも $p < .01$ ）があった。一方, 意欲低下領域尺度における「学業意欲」, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「過去受容」「希望」との間では有意な負の相関（それぞれ $r= -.43, r= -.51, r= -.59, r= -.18, r= -.61$, いずれも $p < .01$ ）があった。

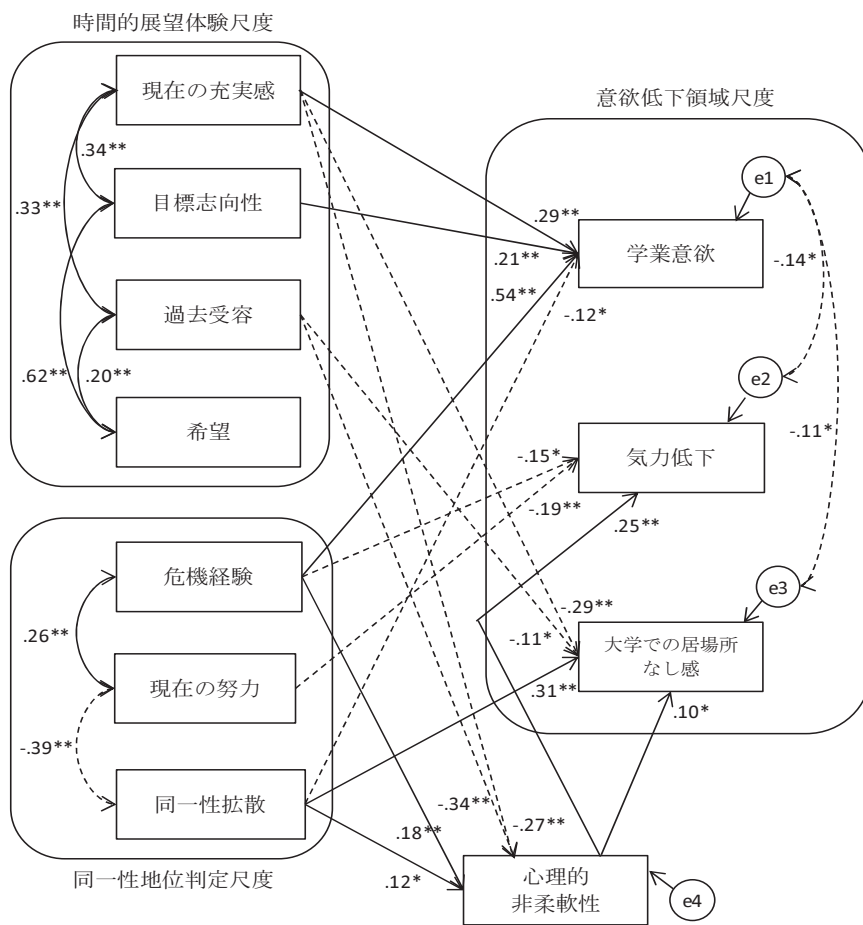
心理的柔軟性は, 意欲低下領域尺度における「気力低下」「大学での居場所なし感」, 同一性地位判定尺度における「危機経験」「同一性拡散」との間で有意な正の相関(それぞれ $r=.22, r=.38, r=.28, r=.30$, いずれも $p < .01$)があった。一方, 時間的展望体験尺度における「現在の充実感」「目標志向性」「過去受容」「希望」との間では有意な負の相関（それぞれ $r= -.48, p < .01, r= -.14, p < .05, r= -.50, r= -.32$, いずれも $p < .01$ ）があった。

続いて, 自我同一性, 時間的展望, 心理的非柔軟性, スチューデント・アパシーの関係の方向, 相互影響性について検証するため, 共分散構造分析を行った。自我同

一性, 時間的展望, 心理的非柔軟性, スチューデント・アパシーがそれぞれどのように関連するのかを調べるため, モデルの設定は探索的に行い, それぞれ結果を検討した。以下に3つのモデルを検討し, それぞれのモデルの適合度は Table5 に示した。

Table 5 モデル 1, 2, 3の適合指標

	モデル 1	モデル 2	モデル 3
GFI	.85	.97	.98
AGFI	.72	.93	.94
CFI	.74	.98	.99
RMSEA	.17	.05	.04
AIC	343.70	122.10	116.71
BCC	346.80	126.10	121.11
カイ二乗	281.70	42.10	28.71
自由度	35	26	22



** $p < .01$, * $p < .05$

Figure1 モデル 3の分析結果
(実線は正のパス, 点線は負のパスを表す)

(1) モデル 1

無気力の規定要因を心理的非柔軟性、心理的非柔軟性の規定要因を時間的展望、時間的展望の規定要因を自我同一性とするモデル (モデル 1) を設定した (Figure 1)。その結果、 $x^2(35) = 281.70, p < .01$ であった。モデル適合度指標 (以下 GFI) の値は .85, 修正適合度指標 (以下 AGFI) の値は .72, Root Mean Square Error of Approximation (以下 RMSEA) の値は .17であった。

(2) モデル 2

無気力の規定要因を自我同一性と時間的展望、時間的展望の規定要因を自我同一性と心理的非柔軟性、心理的非柔軟性の規定要因を自我同一性とするモデル (モデル 2) を設定した。その結果、 $x^2(26) = 42.10, p = .05$ であった。GFI の値は .97, AGFI の値は .93, RMSEA の値は .05であった。

(3) モデル 3

心理的非柔軟性の規定要因を時間的展望と自我同一性、無気力の規定要因を時間的展望と自我同一性、心理的非柔軟性とするモデル (モデル 3) を設定した。その結果、 $x^2(22) = 28.71, p = .05$ であった。GFI の値は .98, AGFI の値は .94, RMSEA の値は .04であった。

以上の 3つのモデルのうち、モデル 3とデータの適合度が最も高く、構成されたモデルは標本共分散行列をよく説明していると判断されたため、モデル 3を本研究の結果として採用した (Figure1)。

得られたパス図 (Figure1) より、現在の充実感から学業意欲にかけて正のパスが、心理的非柔軟性、大学での居場所なし感にかけてそれぞれ負のパスが得られた。目標志向性からは学業意欲にかけて正のパスが得られた。過去受容からは気力低下、心理的非柔軟性にかけての負のパスが得られた。希望は他の変数に有意な影響を与えていなかった。また、危機経験から学業意欲、心理的非柔軟性にかけてそれぞれ正のパスが、気力低下にかけての負のパスが得られた。現在の努力からは気力低下にかけて負のパスが得られた。同一性拡散からは大学での居場所なし感、心理的非柔軟性にかけてそれぞれ正のパスが、気力低下にかけて負のパスが得られた。さらに、心理的非柔軟性から気力低下、大学での居場所なし感にかけてそれぞれ正のパスが得られた。

IV. 考察

本研究では、大学生を対象に、自我同一性、時間的展望、心理的柔軟性がそれぞれどのようにスチューデント・アパシーに影響を与えているのかを検討することを目的とした。

相関分析の結果からは以下のことが推察される。まず、意欲低下領域尺度と時間展望体験尺度との相関の結果から「学業意欲」と「目標志向性」との間に中程度の正の相関が見られ、将来の目標をもっていることは学業意欲

と関係があることが明らかとなった。また、「大学での居場所なし感」と「現在の充実感」、「希望」との間に中程度の負の相関が見られ、毎日の生活が充実していると感じられなかったり、自分の将来に希望がもてなかったりすることは、大学で自分の居場所がないと感じることと関係していることが示された。これは、下山 (1995) の先行研究において、生活に張りのなさを感じるということが大学生の意欲低下全般と関連しているという結果を支持しているといえる。

意欲低下領域尺度と同一性地位判定尺度との相関の結果から「学業意欲」と「現在の努力」との間に中程度の正の相関が見られた。これより、現在目標達成のために努力をしていることと学業意欲には関係があることが明らかとなった。また、「大学での居場所なし感」と「同一性拡散」との間には中程度の正の相関が見られた。これより、現在特に打ちこむこともなく、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももっていない同一性拡散の状態と、大学で居場所がないと感じる程度には関係があることが示された。この結果は、馬場 (1976) の先行研究において、同一性拡散をスチューデント・アパシーの重要な発生機制の一つとする指摘を支持しているといえる。さらに、スチューデント・アパシーは進路の未決定を伴うという笠原 (1978) の先行研究とも一致する。さらに、「学業意欲」と「同一性拡散」との間には中程度の負の相関が見られ、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももっていない同一性拡散の状態は、学業意欲と関係していることが明らかとなった。

時間展望体験尺度と同一性地位判定尺度との相関の結果から「目標志向性」、「希望」と「現在の努力」との間に中程度の正の相関が見られた。これより、将来の目標をもっていることや自分の将来に希望をもっていることは、現在目標達成のために実際に努力をしていることと関係があることが示された。また、「現在の充実感」、「目標志向性」、「希望」と「同一性拡散」との間に中程度の負の相関が見られた。これより、自分が人生で意味あることができないと感じたり、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももていなかったりする同一性拡散の状態は、毎日の生活が充実していると感じられないことや将来の計画をもたないこと、自分の将来に希望がもてないことと関係していることが明らかとなった。これは、同一性拡散群は日常の生活において退屈・空虚感を感じるという森・河村 (2001) の先行研究や、同一性拡散地位は自分の現在・未来についてネガティブにイメージしているという都筑 (1993) の先行研究の結果を支持するものといえる。

時間展望体験尺度と心理的柔軟性尺度との相関の結果から「現在の充実感」、「過去受容」と「心理的非柔軟性」との間に中程度の負の相関が見られた。これより、自分の思考に囚われたり望まない思考を排除しようとしたりする心理的非柔軟性を抱えることは、毎日の生活に満足

していないことや自分の過去を受け入れられないことと関係していることが示された。

自我同一性と時間的展望、心理的非柔軟性、スチューデント・アパシーの関係の方向、相互影響性についての検討では、3つのモデルを検討し、適合度から最終モデルを採択した。

結果より、「学業意欲」に対して、「現在の充実感」、「目標志向性」、「危機経験」は正のパス、「同一性拡散」は負のパスとなっていた。これより、毎日の生活に充実感をもっていること、将来の目標があること、同一性達成のための危機を経験していることは、学業意欲を高める可能性が示唆された。一方で、現在特に打ちこむこともなく、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももっていない同一性拡散の状態は、学業意欲を低めることが示された。この結果は、馬場（1976）の先行研究において、同一性拡散をスチューデント・アパシーの重要な発生機制の一つとする指摘を支持しているといえる。また、「気力低下」に対して、「危機経験」、「現在の努力」は負のパスとなっていた。これより、過去に高い水準で危機を経験した上で、現在自己投入していることや、目標達成のために現在努力をしていることは、気力低下を抑制すると考えられる。

さらに、「大学での居場所なし感」に対して、「同一性拡散」は正のパスとなっていた。これより、現在特に打ちこむこともなく、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももっていない同一性拡散の状態は、大学で自分の居場所がないと感じる程度を高める可能性が示唆された。これは、下山（1995）の先行研究における、生活に張りのなさを感じる事が大学生の意欲低下全般と関連しているという結果を支持しているといえる。一方で、「大学での居場所なし感」に対して「現在の充実感」、「過去受容」は負のパスとなっていた。これより、毎日の生活に充実感をもっていることや自分の過去を受け入れていることは、学生生活で打ちこむことがないと感じたり、大学での居場所がないと感じたりする程度を低めることが考えられる。

「心理的非柔軟性」に対して、「危機経験」、「同一性拡散」は正のパスとなっていた。これより、同一性達成のために危機を経験することは、自分が嫌な気持ちになることを恐れたり、そうならないように自分のネガティブな気持ちを回避したりするという感情回避に、一時的につながることもあるのだと考えられる。さらに、これまでに自分について自主的に重大な決断をしたことがなく、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももっていない同一性拡散の状態もまた、ネガティブな感情の回避につながり、ひいては困難場面からの回避行動へとつながると考えられる。一方で「心理的非柔軟性」に対して、「現在の充実感」、「過去受容」は負のパスとなっていた。これより、毎日の生活に充実感をもっていることだけではなく、自分の過去ないし、過去から現在にか

けての自分をを受け入れていることは、自分のネガティブな気持ちを回避するという体験回避を抑制することが示された。

「心理的非柔軟性」から「気力低下」、「大学での居場所なし感」に対して正のパスとなっていた。これより、自分が嫌な気持ちになることを恐れたり、そうならないように自分のネガティブな気持ちを回避するという感情回避は、授業に出る気がしなかったり、授業の課題を出さなかったりという気力の低下へとつながることや、大学で自分の居場所がないと感じる程度を高めることが明らかとなった。これは、困難場面からの回避行動をスチューデント・アパシーの特徴とする多くの先行研究の指摘と一致するものであった。

本研究では、大学生を対象に、自我同一性、時間的展望、心理的柔軟性がそれぞれどのようにスチューデント・アパシーに影響を与えているのかを検討することを目的とした。

結果から、同一性が拡散している状態は、学業に対する意欲を低めることが明らかとなった。そのため、将来「こんなことがしたい」という確かなイメージももていないときは、学業に身が入りにくいと言える。一方で、現在の充実感や目標志向性、危機経験は、学業意欲を高めることが示された。そのため、スチューデント・アパシーを防ぎ、学業に対する意欲を高めるには、毎日の生活に充実感をもつことやおおまかな将来計画をもつこと、同一性達成のための危機を経験していることが重要であると言える。

また、同一性拡散は、直接的に大学での居場所なし感を高めると同時に、心理的非柔軟性も高め、さらにその心理的非柔軟性は大学での居場所なし感を高めることが示された。そのため、現在特に打ちこむこともなく将来のイメージももていない同一性拡散の状態は、大学で自分の居場所がないと感じる程度を直接的に高めるだけでなく、ネガティブな感情を回避する心理的非柔軟性を高めることを介して、間接的にも大学での居場所なしを高めると考えられる。

危機経験と現在の努力は気力低下を抑制することが明らかとなった。つまり、自分がどういふ人間であり、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある、または今真剣に考えていることや、その危機を経験した上で目標をなしとげるために努力をしていることは、授業に出る気がしなかったり、授業の課題を出さなかったりという気力の低下を、抑制すると言える。

また、心理的非柔軟性は気力低下や大学での居場所なし感を高めることが明らかとなった。現在の充実感と過去受容はこの心理的非柔軟性を低めることも示された。さらに、現在の充実感と過去受容は大学での居場所なし感を直接的に低めることも明らかとなった。これらのことから、毎日の生活が充実していると感じることや自分の過去を受け入れることは、直接的に大学で自分の居場

所がないと感じる程度を低めると同時に、心理的非柔軟性を低めることで、間接的にも大学での居場所なし感や気力低下が高まることを抑制することにつながると考えられる。

以上から、スチューデント・アパシーを予防・軽減する一つ目の要素として、将来「こんなことがしたい」という、将来の計画や具体的なイメージをもつこと、が重要であると考えられる。そのためには、自分はどんな人間で、何をしたいのかについて知っておく必要がある。これに関して、ACT (Acceptance and Commitment Therapy) では、マインドフルネスだけでなく、価値づけられた生き方／価値に沿った生き方 (valued living)、つまりいつも自分が大切にしたい価値に従って行動することが重要であるとされている。価値とは、自分は人生でこれをやりたい、これを大切にしたい、いつもこんなふうに行動したい、ということ。「言葉にしたもの」である。価値は、日々の生活において私たちを導き、私たちの行動を動機づける「軸となるもの」であり、言い換えると、選択された人生の方向性である。比喩的に言えば、価値とはコンパスのようなものである。自分が人生で大切にしたい価値が明確化されていないと、自分は人生でこれをやりたい、といった人生の方向性が決まらず、その結果、日々の生活でどんな行動をとればよいのかを見失うことになる。そうした状態が特に学問分野に対してみられることこそが、スチューデント・アパシーの状態なのではないかと考えられる。よって、自分はどんな人間なのか、人生でどんなことを大切にしていきたいのか、将来どんなことがしたいのかについて、いろいろな選択を比べながら真剣に考え、自主的に選び決断することが、スチューデント・アパシーの軽減または予防につながると考えられる。もっとも、そのプロセスの中では、葛藤や、希望と現実との狭間で悩むことも出てくる。そうした危機の体験は、一時的に心理的非柔軟性を高めてしまう可能性も本研究結果から示唆されているが、そうした中で自らが大切にしたい価値とは定まってくるのだと考えられる。また、スチューデント・アパシーを予防・軽減する二つ目の要素として、自分の価値に沿った人生の方向性や具体的な将来の目標をもつことに加え、それらを成し遂げるために、現在努力をしていることも重要であると考えられる。近年の大学生は、認知的には将来のことをそれなりに考えていても、それが日常生活や行動に結びついておらず、いわば頭だけの話となっていることが指摘されている (溝上, 2006)。そのため、将来の自己像を頭の中で描くだけでなく、将来の自己像を日常生活や他者との関係の中で試す活動に従事することで、アイデンティティ (自我同一性) を形成することが必要であると考えられる。また、ACTにおいても、自分の価値を知ることに加え、コミットされた行為 (committed action) を行うことが重要とされている。コミットされた行為とは、価値に基づいて生きるために

必要な行動をとることを指す (Harris, 2009)。よって、自分の価値に沿った人生の方向性や具体的な将来の目標をもつだけでなく、その価値に基づいて生きるために必要な行動をとることや目標を達成するための努力をすることが、スチューデント・アパシーの軽減または予防につながると考えられる。

青年期はただ児童期の延長線上にあるわけではない。青年期は、親や教師などの「重要な他者 (significant others)」(Sullivan, 1953) の影響を受けて構築してきた児童期までの人格を、自らの価値や思想、将来の生き方などをもとに見直し、再構築していく発達期である。この時期に、自分がどんな人間であり、人生でどんなことをしていきたいかについて真剣に悩み、その答えを知ること、そして自分の人生設計に沿って実際に行動を起こすことは、スチューデント・アパシーの抑制のために重要なことであると考えられる。

本研究の課題としては、本研究では調査対象者がいる一つの大学の大学生に限定されているため、本結果が他の大学の学生にも適用できるかは慎重である必要がある点が挙げられる。調査対象者をさらに広げて検討していく必要があるだろう。また、本研究では男女別のデータの比較、学年ごとのデータの比較を行っていない。そのため、性差や学年の違いによって、結果に差が出るかを検討する必要もあるだろう。

V. 引用文献

- 馬場謙一 1976 自我同一性の形成と危機 —E.H. エリクソンの青年期論をめぐって— 笠原嘉ら (編) 青年期の精神病理 I 至文堂, 111-128.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton. (小此木啓吾訳編 1973. 自我同一性 誠信書房)
- Greco, L. A., Lambert, W., & Baer, R. A. 2008 Psychological inflexibility in childhood and adolescence: development and evaluation of the Avoidance and Fusion Questionnaire for Youth. *Psychological Assessment*, 20, 93-102.
- Harris, R. 2009 *ACT made simple*. New Harbinger.
- Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. 2014 Developing the scale regarding psychological inflexibility in Japanese early adolescence. *Poster presented at 30th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity*, Honolulu.
- 狩野武道・津川律子 2011 大学生における無気力の分類とその特徴 教育心理学研究, 59, 168-178.
- 笠原 嘉 1978 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構

- 造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Marin, R. S 1991 Apathy: a neuropsychiatric syndrome. *Journal of Neuropsychiatry and Clinical Neurosciences*, 3, 243-254.
- 丸井文男 1967 大学生のノイローゼ—意欲減退症候群— 教育と医学, 15, 476-483.
- 溝上慎一 2006 大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ! 有斐閣アルマ
- 森 美海子・河村茂雄 2001 大学生における自我同一性地位と充実感に関する一研究 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 11, 115-125.
- 小此木 啓吾 1974 解説:モラトリアムとアイデンティティ拡散 小此木啓吾(編)アイデンティティ 現代のエスプリ No.78, 至文堂
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 12-21.
- 桜井茂男 1995 「無気力」の教育社会心理学—無気力が発生するメカニズムを探る— 風間書房
- 桜井茂男 2000 無気力の心理学—動機づけ概念を中心にした無気力発生モデルの検討— 現代のエスプリ, 392, 61-70.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 下坂 剛 2002 無気力研究の心理学的展望 人間科学研究(神戸大学発達科学部人間科学研究センター), 9, 87-96.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として— 東京大学出版会
- 下山晴彦 2000 スチューデント・アパシーの3次元構造モデル 現代のエスプリ, 392, 55-60.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 45-50.
- 杉山 成・神田信彦 1996 青年期における一般統制感と時間的展望—アパシー傾向との関連性— 教育心理学研究, 44, 418-424.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究 教育心理学研究, 41, 200-208.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 都筑 学 1994 自我同一性による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- Walters, P. A. J. 1961 *Student Apathy in Emotional Problem of the Student* B.Jr., & McArthur, C. C. (ed) Appleton-Century- Crofts. (笠原嘉・岡本重慶(訳) 1975 学生のアパシー 石井完一郎他(監訳) 学生的情绪問題 文光堂)
- 渡邊恵子・赤嶺淳子 1996 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望—学年差・性差の検討— 人間研究, 32, 22-35.
- 柳原美美佳・川井智理・嶋 大樹・熊野宏昭 2014 自己関連行動クラスの保有パターンと体験の回避及び行動活性化との関連性の検討 早稲田大学臨床心理学研究, 13, 43-51.
- 吉田辰雄・鈴木順一 1985 無気力学生の心理学的研究 (1) 東洋大学児童相談研究, 4, 1-18.

(2015年8月24日受付)

(2015年9月25日受理)